
魅惑のコーヒーカップ

shirahae

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魅惑のコーヒーカップ

【Nコード】

N4693D

【作者名】

shirahae

【あらすじ】

毎週金曜日にお題がだされてそれに沿って描く、劇場「すぽつと」。

今回のお題はコーヒーカップマジック。初心者でも参加OKのことで参加させていただきました。私の作品、いつ図書館（いつもの図書館）に出てくるあすかとゆっき。彼らはとある遊園地へデートに行くがその遊園地のコーヒーカップにはある秘密が！

(前書き)

劇場「すぽっと」の一部、お題は「コーヒークップマジック」。

次々に新しいものが出てきて古いものが消え去ってゆくこの現代。パソコンもケータイも一年前のものならもうおじいさんおばあさん。そんな流行連続時代の日本で、ねずみの国や海外映画を集めた国ではない、昭和から続いている遊園地がここにあった。

その遊園地の名前は青山遊園地。遊園地の目玉はたいてい巨大観覧車やジェットコースターを思い出されるが、この遊園地の目玉はそんな迫力のあるものでもなく目立つものでもない。ひっそりとした、一見どこの遊園地でもあるようなもの……そう、コーヒーカップだ。コーヒーカップは巨大観覧車のような爽快な気分が味わえないし、ジェットコースターのような興奮も得られない。ただ乗っているだけのメリーゴーランドと比べると華やかでもないが、このコーヒーカップに乗ると、この地味に見えるものに不思議な力が潜んでいることに気づかされるのである。

「ねえ優輝、ここの遊園地っていったことある？」

「ん？ 青山遊園地……？ 聞いたことすらないけど」

「行ってみない？ ここの目玉はコーヒーカップらしいんだけど」

「コーヒーカップとかどこでもあるようなやつじゃねーの？」

飛鳥の持っているパンフレットを優輝が隣から覗き込む。優輝の言うとおりぱっと見た感じは古い遊園地ならどこにでもあるような普通のコーヒーカップ。けれども飛鳥は好奇心が旺盛な大学生、これがどう普通のコーヒーカップと違うのか、なぜここはあえてコーヒーカップを目玉としているのかを実際行って確かめたく、半ば無理やり優輝を引っ張ってその青山遊園地へと向かった。

入場料二千円を払い中に向かった二人は、入ってすぐにある遊園

地の大まかな輪郭を少し浮かび上がった腺で書かれた、所々文字が剥けているプラスチック製の地図を見た。目玉とされているコーヒーカップは入場ゲートから一番離れた道の突き当たりにあるようだ。「いきなり目玉に行っちゃうと、後が楽しくないから最後に行かない？」

「そうだな。特に何もなかったとしてもそれまで考えてるのが楽しいし」

そんな会話をしながら二人は観覧車とコーヒーカップを避けながら、どこにでもあるようなアトラクションを楽しんだ。観覧車を避ける理由は、

「観覧車から見下ろしたときにコーヒーカップの秘密が見えちゃったら面白くないじゃん」

という飛鳥の意見が採用された結果であった。

この遊園地はあまり名前を知られていないためか、日曜であるのにもかかわらず行く所人があまりいなかった。飛鳥と優輝にとってはそちらのほうが待ち時間がなくてよかったようだ。昭和の頃からこの現代まで続いているというのが不思議に思える。そんなことはさておき、二人が観覧車とコーヒーカップ以外乗り終えた頃には日が少し傾いてきていた。

「一日で全部回れるとはなかなかちっさい遊園地だな……」

「古いからそんなもんでしょ。それより、どっち行く？」

少し興奮気味な声で飛鳥が優輝に判断を促した。

「んー。コーヒーカップはやっぱラストだろ！」

「おっけい！ じゃー観覧車に行こう！」

観覧車に乗り徐々に遊園地の全貌が見え始めてくると、それに合わせるかのように飛鳥と優輝の気持ちは高ぶってきたようで、次第に会話が増えてゆく。

「どんなのかな？ 広いのかな？ それとも逆に狭いとか？」

「カップのデザインが斬新とかかもしれねーよ」

「それなら写真でわかるじゃん」

「数個にひとつっていうレアな感じのやつがあるとか！」

そんな話をしている間にコーヒークップの在る場所が見えてきた。
それは……

「……何もわからないね」

餌を前にお預け状態で待たされる犬のような表情で飛鳥が言った。

「やっぱ実際行ってみないとわかんねーのかな」

「ただ一つだけ珍しいのは屋内だつてことだけ。あの下にどんな秘密があるのかな？」

地図で見たコーヒークップが在るであろう場所には大きな建物が建っていた。

二人はあまり手がかりを得られなかった観覧車を降り、コーヒークップのほうに向かって歩き出した。ゆっくりと、おいしいものを最後に食べる子供のように、楽しみをとっておくかのように。

次の角を曲がるといよいよコーヒークップのあるところにとどろき着く。二人は一步一步踏みしめながら歩き、そして打ち合わせていたかのように角のところで並んで立ち止まった。

「じゃあ……行くよ！」

「おう！」

「せーのっ！」

驚いた。人の多さに。観覧車から見ていたときには屋根で見えなかったのだが、広く開け放たれた入り口から、おしくらまんじゅうをしているといつてもいいぐらい人がぎゅぎゅうに詰まっているのが見えた。あまりの人の多さに全く前の様子が見えない。飛鳥は一人群集の方へ走り出し、後ろの方からぴよんぴよんジャンプしたり、背伸びをしたり、横から覗こうとしたが努力の甲斐なく何もわ

からない。追いついた優輝は飛鳥がどっかいつてしまわないようにしっかりと手をつなぎ、

「まあ、並んで待つとこうぜ」

と微笑んだ。優輝は、群集の開始地点であろう方向をじっと見つめている飛鳥の手を引っ張り、最後尾と書かれた看板を持っている係員のところへ行行って尋ねた。

「すみません。これ、何分待ちですか？」

「そうですねー。一時間あれば乗れると思います」

「一時間?!」

綺麗にハモった声で二人は思わず叫んだ。

「当遊園地の目玉ですからねえ」

「これは相当楽しめそうだな……」

ちよつとずつ前に進む列を飛鳥と優輝はワクワクしながら歩いた。十分経過。二十分経過……五十分経過。前の様子が見えてきた。飛鳥が再び背伸びをして見ると、もったいぶるかのように壁が一面にあり、列が始まっているところにはカーテンがかかっていた。やはり最後まで待たないと見えないようだ。

ようやくカーテンの前に来て、ついに

「どうぞお進みください」

の声がかかった。二人は同時にカーテンをくぐった……。

「え……」

「……普通じゃん」

他のアトラクションと同じようにどこにでもあるようなコーヒークップが二人を迎えた。一つのカップには三人まで乗れ、それが七つあり、カップの中と全体的な広さは特に変わった点はない。二人は白地にピンクのラインが一筋入ったシンプルなカップへ誘導され、座った。周りの客を見渡した優輝があることに気づいた。

「子供居なくね？」

「あ、ほんとだ」

七つのカップの中身を見ると、中年の夫婦、二十代後半や三十代だと思われる青年のグループ、飛鳥と優輝のような大学生と思しきカップルなど。そうこうしているうちにアナウンスが流れ始めた。

「みなさま、大変長らくお待たせいたしました。カップの中心にある円形のハンドルをしっかりと握り、力を合わせてできるだけ早くカップを回転させてくださいませ」

カップの中心を見ると、車のハンドルの表面を水平にしたような感じの持ち手があった。飛鳥と優輝は向かい合わせになるように座り、スタンバイした。

「では、お楽しみください」

「じゃあ時計回りにまわそうぜ！」

「了解！」

音楽が流れ出した。すると皆一斉にカップを回し始めた。飛鳥と優輝もそれに倣ってまわそうと思いいハンドルをぎゅっと握ったとき、妙な魅力を感じた。

なんともいえないフィット感。そしてちょうどいい具合に効いた滑り止め。二人は夢中になってまわし始めた。まわすこと以外考えられないぐらいに集中し、必死に回す二人。周りの客も皆同じようだ。外の景色を見る余裕など無い。ハンドルをしっかりと握ってひたすらカップを回す。ただまわしているだけなのに何故か楽しくて仕方が無い！

そして優輝はまわすことに夢中になっているとふと何かが思い浮かんできた。

(ん……この感覚は……いつか感じていたような気がする)

(ああ！ わかった！ 懐かしいな……)

「お楽しみいただけただけでしょうか？ またのご来場をお待ちしております」

ぞろぞろと放心気味の客たちが出口に向かう。皆、何かに満ちた表情をしている。もちろん飛鳥も優輝も。

「飛鳥。 また来ような！」

「うん！」

彼らが通る出口の壁にはメッセージが書かれたプラスチック製の板が一つあった。

『当遊園地の目玉、コーヒークップにお乗りいただきありがとうございます。ごさいました。』

いかがでしたか？

幼少時代感じていたはずの、あのなんでもないことにただ夢中になるだけで

楽しく感じられる心、取り戻しましたか？

せわしない現代にお疲れになったとき

再びご利用くださいませ！

青山遊園地
『せいざん
青山遊園地』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4693d/>

魅惑のコーヒーカップ

2010年10月8日15時46分発行